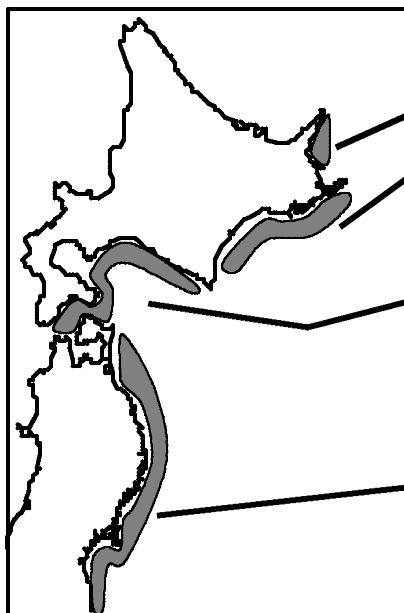


## 平成18年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター  
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －

### 今後の見通し(2006年7月～9月)

常磐～北海道東部までの北部太平洋海域におけるスルメイカの来遊水準は2005年を上回る



○北海道東部～根室海峡周辺海域：  
来遊量は2005年並みかやや下回る  
魚体は18～22cmが主体

○津軽海峡～北海道南部海域：  
来遊量は2005年を上回る  
魚体は19～21cmが主体

○常磐～三陸海域：  
来遊量は2005年を上回る  
魚体は20～24cmが主体

### 問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当：青木、笠原、田中(博)、佐藤

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1

電話：03-3502-8111(内線7375、7376)、直通電話：03-3501-5098、ファックス：03-3592-0759

電子メール：yuusuke\_satoh@nm.maff.go.jp

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 業務推進部

〒085-0802 釧路市桂恋116番地

電話：0154-91-9136、ファックス：0154-91-9355、電子メール：www-hnf-info@ml.affrc.go.jp

なお、本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査推進委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)、及び北海道区水産研究所のホームページ(<http://www.hnf.affrc.go.jp/>)に掲載されます。

## 参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場 北海道立函館水産試験場	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
青森県水産総合研究センター	高知県水産試験場
岩手県水産技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
宮城県水産研究開発センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
福島県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所
茨城県水産試験場	東北区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	日本海区水産研究所
神奈川県水産技術センター	中央水産研究所
静岡県水産試験場	
三重県科学技術振興センター 水産研究部	

# 平成18年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報

## 今後の見通し（2006年7月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～北海道南部海域、  
北海道東部～根室海峡周辺海域

対象漁業：いか釣り、底曳網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2006年級群）。

魚体の大きさは外套背長で表示。

### 1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底曳網、定置網、まき網）

（1）来遊量：2005年を上回る。

（2）漁期・漁場：期間を通じて漁場となる。

（3）魚体：8月は20～24cmが主体。

### 2. 津軽海峡～北海道南部海域（いか釣り、定置網）

（1）来遊量：2005年を上回る。

（2）漁期・漁場：津軽海峡は期間を通じて漁場となる。

津軽海峡東口～北海道南部海域の漁場形成は、  
2005年よりやや遅れる。

（3）魚体：8月は19～21cmが主体。

### 3. 北海道東部～根室海峡周辺海域（いか釣り、定置網）

（1）来遊量：2005年並みかやや下回る。

（2）漁期・漁場：北海道東部海域の漁場形成は2005年並み。

根室海峡周辺海域の漁場形成は10月以降になる。

（3）魚体：8月は18～22cmが主体。

## 漁況の経過（2006年4月～6月）および今後の見通しについての説明

### （1）資源状態

太平洋海域で漁獲されるスルメイカは、冬季発生系群を主体にし、それに秋季発生系群の一部が含まれると考えられている。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から推測すると、1970～1980年代は低位水準で推移し、1989年から増

加に転じ、近年では1996年（漁獲量：276,249トン）が最も資源水準の高い年となった。増加に転じた1989年から2000年までは資源水準の変動が大きかったが、2001年以降は中位水準で安定していたと考えられる。なお、2005年7～9月の常磐以北太平洋海域の漁獲量（生鮮）は50,432トンであり、2004年同期（58,100トン）をやや下回った。

## （2）関連調査結果

### A：第1次漁場一斉調査

6月中旬～下旬に実施された第1次漁場一斉調査（釣り）の結果、沿岸域（38°N以北、144°E以西）の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当り漁獲尾数）は0.3であり、2005年（0.3）並みであった。沖合域（38°～42°N、144°～154°E）では0.4であり、2005年（0.1）を上回った。全水域では0.4となり、2005年（0.2）を上回ったが、2001年以降の平均（1.2）の29%の水準に留まった。CPUEが10を越える地点は認められず、ほぼ全域でCPUEは低い水準であった。

### B：その他関連調査

- ・新規加入量調査結果：5月上旬～下旬に常磐～三陸沖合域で実施された表層トロールネットを用いた漁獲試験の結果、外套背長5cm以上のスルメイカの平均採集尾数（1曳網当たり漁獲尾数）は39尾であり、2005年（299尾）を大きく下回った。しかし、外套背長10cm以上の大型個体の平均採集尾数は1.7尾であり、2005年（0.1尾）を上回った。分布の中心は東経148～158度付近にあり、2005年よりもやや沿岸よりに分布の中心を移していた。
- ・日本海における一斉調査結果：日本海で6月下旬～7月上旬に実施された一斉調査において、津軽海峡西口周辺海域（39°～42°N、138°～140°E）における平均CPUEは15.4であり、2005年（9.1）を上回った。
- ・岩手県沿岸域における漁獲試験結果：6月中旬～下旬に岩手県沿岸域で実施されたいか釣り調査によると、2006年の平均CPUEは0.4であり、2005年（0.0）を上回ったが、2001年以降では2005年に次ぐ低い水準であった。

## （3）2006年の各海域の漁況経過（主に5月～6月）

- ・本州南方・四国海域：高知県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（18トン）は2005年（9トン）を上回った。和歌山県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（14トン）は、2005年（15トン）並みであったが、CPUEは前年比61%に低下した。三重県沿岸での

釣りによる5～6月の漁獲量（130トン）は、2005年（48トン）を大きく上回り、CPUEも前年比152%に増加した。また中型まき網による5～6月の漁獲量（53トン）は2005年（10トン）を大きく上回った。静岡県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（12トン）は、2005年（9トン）をやや上回ったが、CPUEは前年並みであった。神奈川県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（0.1トン）は、2005年（0.5トン）を下回った。また、定置網による5～6月の漁獲量（1.5トン）も2005年（5.1トン）を下回った。

- ・ **房総・常磐南部海域**：千葉県沿岸での釣りによる5～6月の漁獲量（0トン）は2005年（0.9トン）を下回った。しかし、定置網による5～6月の漁獲量（5.4トン）は2005年（3.0トン）を上回った。茨城県沿岸での底曳網による4～6月の漁獲量（2.3トン）は、2005年（1.2トン）を上回ったが、CPUEは前年比39%に減少した。
- ・ **常磐北部・三陸海域**：福島県沿岸での底曳網による6月の漁獲量（39トン）は、2005年（169トン）を大きく下回った。また、CPUEも前年比37%に減少した。宮城県沿岸での底曳網による6月の漁獲量（254トン）は2005年（458トン）を大きく下回り、CPUEも前年比35%に減少した。しかし、釣りによる漁獲量（90トン）は、2005年（2.7トン）を大きく上回り、CPUEも前年比243%に大きく増加した。岩手県沿岸での釣りによる6月の漁獲量（37トン）は、2005年（4トン）を大きく上回り、CPUEも前年比181%に増加した。また、定置網による漁獲量（662トン）も、2005年（459トン）を上回った。青森県沿岸では、八戸および白糠沿岸の釣りによる6月の漁獲量（漁獲無し、0.1トン）は、ともに2005年（1トン、87トン）を大きく下回った。
- ・ **津軽海峡・北海道南部海域**：青森県大畑沿岸での釣りによる6月の漁獲量（0.1トン）は、2005年（0.1トン）並みの低い水準であった。道南函館港での釣りによる漁獲量（200トン）は、2005年（173トン）を上回り、CPUEも前年比117%に増加したが、漁場は津軽海峡西口の日本海側であった。
- ・ **道東海域**：道東近海での釣りの初漁はまだである（2005年は8月1日）。

#### （4）魚体の大きさ

- ・ 5月の新規加入量調査（表層トロール）で漁獲されたスルメイカの全調査地点での外套背長組成は、モードが3cmにある単峰型の組成であり、2005年と比較してモードで1cm小型であった。また、5～10cmまでの個体の割合が2004年以降では最も低くなっていた。

- ・6月の漁場一斉調査（いか釣り）で漁獲されたスルメイカ的全調査地点の外套長組成は、モードが16cmにある単峰型の組成であり、2005年よりモードで2cm大型であった。また、20cm以上の大型個体の割合が2002年以降では最も高くなっていた。海域別では、三陸近海がモード18、20cm（2005年：15、16cm）、津軽海峡周辺海域がモード15cm（2005年：14cm）、沖合域がモード16cm（2005年：10、13cm）であった。
- ・宮城県沿岸で6月中旬～下旬に底曳網で漁獲されたスルメイカのモードは18～24cmであり、2005年より3～6cm大型であった。岩手県沿岸で6月に定置網で漁獲されたスルメイカのモードは16～18cmであり、2005年より2cm大型であった。

#### （5）今後の見通しの説明

- ・漁場一斉調査結果および本年6月までの各地の漁獲状況から判断すると、7月上旬現在で、太平洋の各海域に来遊しているスルメイカ冬季発生系群は、一部の海域で来遊の遅れは見られるものの、おおむね2005年を上回る水準であると推測される。しかし、5月上旬～下旬に実施された新規加入量調査では、外套背長5～10cmの小型個体の漁獲が2005年を大きく下回る水準であった。また、千葉県や静岡県での定置網における小型個体の漁獲量も2005年を下回る水準であった。これらの結果から、漁期中盤以降に加入すると考えられる後続群の豊度は、2005年を下回る水準になると予測される。以上のことから、本予測期間である7～9月にかけての来遊水準は2005年を上回る水準であるが、近5年間で比較すると2005年に次ぐ低い水準に留まると予測される。
- ・常磐～三陸沿岸域での漁獲対象資源は太平洋沿岸域を北上する群が主体であり、これに津軽海峡から加入する日本海由来の群れが加わると推定されている。三陸近海および津軽海峡周辺海域における漁獲情報と調査結果から、三陸周辺海域に来遊するスルメイカの資源水準は2005年を上回ると推測される。魚体は、一斉調査及び漁獲物の測定結果から、前年よりも2～4cm程度大型の個体が主体になると考えられる。
- ・津軽海峡～道南海域での漁獲対象資源は、津軽海峡から加入する日本海由来の群と太平洋を北上する群である。漁獲情報と日本海で実施された一斉調査結果から、津軽海峡西口周辺海域の資源水準は2005年を大きく上回ると推測されるが、津軽海峡及び海峡東側への来遊は前年より遅くれているため、海峡東口周辺海域での漁期は2005年よりも遅れると予測される。魚体は、一斉調査及び漁獲物の測定結

果から、前年よりも1～2cm程度大型の個体が主体になると考えられる。

- ・道東～根室海峡周辺海域に来遊するスルメイカは、太平洋沖合を北上する群と考えられている。沖合域における一斉調査の結果から、太平洋沖合域に分布するスルメイカの資源水準は2005年並みかやや上回ると推定される。しかし、本年は道東沖合域の北上暖水の張り出しが弱いため、道東沿岸域への北上回遊が前年並みに遅れると推測される。また、漁期後半の来遊量は、5月の沖合域での表層トロール調査から、2005年を下回ると推測される。以上のことから、7～9月における来遊水準は2005年並みかやや下回ると予測される。また、漁期前半の魚体は前年より3～6cm大型であるが、漁期後半には小型の個体が混じると推測される。

本邦北部太平洋でのスルメイカ漁獲量（7～9月）  
（いか釣り・定置網・底曳網・まき網、生鮮、ト）

年	常磐・三陸	津軽海峡・道南	道東・根室海峡	合計
1993	16,241	20,196	2,612	39,049
1994	24,646	20,348	5,064	50,058
1995	34,334	14,941	3,463	52,738
1996	79,062	30,662	11,441	121,165
1997	28,417	30,193	4,031	62,641
1998	9,858	7,028	2,725	19,611
1999	23,730	10,912	963	35,604
2000	37,481	11,845	7,125	56,451
2001	23,955	15,519	5,414	44,889
2002	35,893	12,588	1,017	49,498
2003	31,316	18,476	2,211	52,002
2004	39,105	15,152	3,843	58,100
2005	29,224	16,581	4,627	50,432